
偽名のアリス

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽名のアリス

【Zコード】

N4344F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

不思議な女の子と憐れな男の子の話。現実と仮想が入り交じります。最後はどうなる・・・？

「アリス……アリス……」

「ん~……眠いです」

どこかのセーラー服を着た女の子が、学校の屋上で昼寝をしている。
女の子の頭上に、人語を話す鳥がいた。
鳥が言つには、女の子の名はアリスらしい。
アリスは、寝ぼけながら、返事をした。

「アリス……メール」

人語を話す鳥は、カタコトの日本語を話している。
アリスは、起上がりつてパソコンを弄る。

「……ドーシタ?」

「……仲間がいるです」

アリスは、独特の喋り方をしてる。

甘つたるい子供の声だった。

鳥は、機械のような無機質な声。

「えっと・・・名前は、トーヤですか？」

パソコンに映し出されたのは、黒い髪に黒縁眼鏡を掛けた地味な優等生だった。

名前、吹雪ふぶき 兔夜とづやらしこ。

二人の名前だけならば、ルイス・キャロル作の有名な本の『不思議の国のアリス』を思わせる。

アリスの容姿は、フランス人形のようだ。金髪に深い青色の瞳。その容姿に、名前は似合つてゐるようだが、偽名なのだ。偽名の理由は、至つて簡単。本名が分らないからなのだ。育て親に貰つた名なのだ。

「会いたいないです」

ふああ、と欠伸をして、パソコンを閉じて教室に戻るアリス。

「トット・・・小屋に帰るです」

鳥の名前はトット。小屋といつのは、アリスの家にあるトット専用の家。

トットは、窓からアリスの家に帰つて行つた。

「騎馬隊を率いてたのは誰だ？吹雪！！」

「総大将は、武田信玄です。ですが、部下の真田幸村が・・・」

「はいはい・・・もう戻る。お前は理屈ばかり述べる

生徒に不人気の先生。兎夜は、少し機嫌が悪くなり、眉間がピク動いてる。

「先生は、屁理屈ばかり述べるです」

「・・・なんだと？」

「逆ギレですか？いつもも教育委員会に訴えられます。貴方がしてること

アリスが言つた途端キレた。しかし、続いた言葉に、さつきまでと色が変わり焦り出した。

「今日はこれで終わる――」

アリスの言葉を遮り、教室を出た先生。

「憐れです。情けないです」

「おいつ・・・アンタ」

話し掛けたのは、先ほど調べた少年だった。

「なんですか？吹雪さん」

「兎夜で良い。アンタ・・・何してんだ？」

「私もアリスで良いです。貴方と同じ」とです

アリスのセリフに驚いた表情をした兎夜。
アリスは、まだ眠そうだから心が読めない。

「トーヤ。移動です

「あ・・・ああ

教室で話してるので、怪しまれる。
二人は、空いてる教室に行つた。

「私は、学園の事件を解決するために送られた・・・ASDです」

「アスド？」

アリスは説明した。

ASDとは、小さい頃から英才教育を受けて、裏から学園やその他を救う集団のことだ。

A s c i e n t i f i c d e f e n s e o r g a n i z a t i o n。

訳は、科学守備組織。

名だけはカッコいいが、実際にアリスしかいないため組織では無い。

「それで？」

「トーヤは、学校パソコンで色んなことしてるんですね？」

核心を突いたのか動搖を隠せない兔夜。

「なんで・・・」

「学校内のサーバーに入れば分るです」

「おこ・・・それつて

確かに犯罪です。ここに監視をさせてはいけませんよ。
これは、ファイクションですので。

「ADSは、許されるのです。ただし、許容の範囲なら

「なるほど・・・でも、俺にどうして?それで、俺を斬るのか?」

「いいえ」

ただアリスは、首を振つただけだった。

「協力してくださ」

「キリキリなじみ無いんじゅ・ も・

アリスの実力なら、確かに不可能は無いだろう。でも、それだけでは、無かったのだ。

「とある人物が、この学校にやつて来るやつです

「とあるへ。」

勿体ぶるアリスに、イライラし出す兔夜。

「『』で何かの取引があるみたいですね。内容までは知りませんが・・・」

「それを調べろって?」

「『』と笑つたアリスに、溜め息しか出ない兔夜。
『』に、『テコボコ』だが最強コンビが出来たのである。

「『』で何で今日なんだ?」

「知りませんです」

話をした日、当日に取引があつたみたいだ。

暗くなつてから、学校に忍び込んで、今は応接室の隣りの部屋で、
聞き耳を立ててる。

『・・・・・』
が・・・一番だな』

『・・・気持ちは良い』

『・・・円くらいでどうだ?』

何人かのオジサンの声がする。

「聞き取れないです」

「何か大事な物みたいだな」

更に聞いてると、一人がキレ出した。

『・・・バレたんだ!...どうしてくれる!...?』

『それは、お前の不注意だ・・・
は、バれないように使え』

やはり大事な部分が聞こえなくて、意味が分らない。

『・・・変な匂いだつて

『使い過ぎだ!..』

『幻覚だつて見える。』

が・・・

ある人の言葉にピクッとする鬼夜。

「乗り込むです」

「えー？」

飛び出した一人は、ガチャツと隣りの扉を開けた。中にいたオジサン達は驚いた顔をしている。

「な・・・お前ら・・・」

「お前らは包囲され・・・・・て・・・・る?」

勢いよく喋つたが、途中から力が抜けていった。

「なんだよ・・・」れ・・・

「・・・・お前が何だ!?」

目の前に広がつてるのは、眩しいオジサン達だった。ブツはブツでも、可哀相な人達必須の物だった。

「カツラ……？」

そう、オジサン達はカツラの善し悪しを決めるために、夜な夜な集まつたのだ。

「アリス……これは？」

「ふふ……引っ掛けましたね。ブツの取引をシャッターです」

写真を構えたアリスは、フラッシュをたきながら撮る。頭に反射して更に眩しい。

「な、ななな……」

「」のネガを回されたく無かつたら、私の言ひことを聞くです

「」の時、兎夜は自分が騙されたんだと漸く気付いたのでした。

「トーヤは相応しいです」

「騙された……」

「実は、これは練習で本番が」の後あるんです」

行きましょう、と兎夜の腕を掴んで歩いて行つた。

細身のくせに腕力があるせいでの、兎夜は抵抗出来なかつた。

アリスがこの後、学校の裏の番長となつたのは定かでは無い。

(後書き)

最後は、どうしたら楽しくなるかなと考えた結果・・・やっぱハゲ
ネタです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4344f/>

偽名のアリス

2010年10月28日06時56分発行